

覇権交代3

ハイブリッド戦争

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

目次

プロローグ	13
第一章 虎口の罠	22
第二章 三すくみ	42
第三章 恵まれし者の家	73
第四章 鴨緑江	98
第五章 朝鮮人狩り	127
第六章 東洋のハワイ	155
第七章 コンボイ	181
第八章 シンガポール陥落	206
エピローグ	224

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

ど もんこうへい
土門康平 一佐。ようやく昇進したことで、浮かれ気味。部下には辟易されている。コードネーム：マウナケア。

〔原田小隊〕

はら だく み
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき
畑 友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだ はるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずの ともお
水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひが ひろみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあや か
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引く張られる。コードネーム：マカルー。

うるしばらたけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チエスト。

い い かける
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

み どうそう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこう じ さねあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：ボーンズ。

かわにし まさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆ ら しん じ
由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

お だ ぎりしやう
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あ び る あきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばねたか ま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あま り ひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の前田拓海一尉の同期。

〈水陸機動団〉

し ば ひかる
司馬光 水陸機動団教官。香港に潜入して、本土派と接触している。

うえぞのひろ き
上園広樹 陸将補。水陸機動団長。

はかま だ てる お
袴田輝男 一佐。水陸機動団幕僚長。

むなかたしん
宗像晋 二佐。第一水陸機動連隊第二中隊長。

いわながはまれ
岩永誉 一尉。第一水陸機動連隊第二中隊第一小隊を率いる。

たつむらしげ と
達村茂人 曹長。岩永誉一尉の女房役。

さかきばらけいすけ
榊原啓介 三曹。地元は九州。

〈第一ヘリコプター団〉

むら た もり と
村田護人 三佐。村田家次男。

むら た りん こ
村田凜子 一尉。村田護人の妹。明野で偵察ヘリに乗っていた。

〔西部方面隊〕

は むろやすのり
葉室泰徳 二佐。西部方面隊西部方面ヘリコプター隊の副隊長。村田護人三佐が教育部隊を出てはじめてUH-1汎用ヘリの操縦棒を握った時の上官。

わ じ まみず え
和嶋瑞恵 一尉。CHのベテラン機長。

〈海上自衛隊〉

〔南支派遣艦隊〕

たかとおまさ や
高遠雅也 海将補。南支派遣艦隊司令を務める。

そめ や とし お
染谷俊雄 一佐。首席幕僚。

ばんどうかね と
板東兼人 一佐。"かが、艦長。

かねさか
兼坂すみれ 二佐。艦隊情報幕僚。

〔第七航空隊〕

ふじわら みさ
藤原美沙 二佐。岩国基地第九一航空隊司令。回転翼パイロットとしてスタートし、後に双発に転じ、海自初のジェットであるU-36Aのライセンスももつ。

〔インド洋派遣艦隊〕

ご み いき み
五味勇美 海将。連合艦隊司令長官。航空集団司令から、自衛艦隊司令を最後に退官。P-3C乗りで、藤原美沙の父親に鍛えられた。

え がわ とし き
江川俊樹 海将補。

たけうち こうすけ
竹内幸輔 一佐。作戦幕僚。

〔ヘリ搭載護衛艦 "ほうしょう、〕

いずみ だ せんえい
泉田宣泳 一佐。艦長。

はしぐち はじめ
橋口肇 二佐。副長。

みやぎ あす か
宮城明日香 一尉。気象班長。

〈航空自衛隊〉

〔二〇二飛行隊〕

むら た まき と
村田先斗 二佐。F-35Aに乗る。村田護人、凜子の兄。

〈統合幕僚監部〉

こ い そ こ よ り
小磯小代里 統合幕僚監部参事官付国外運用班長。青柳睦己と岩倉久彌を尻に敷く督戦隊の官僚三人組の一人。制服組からは蛇蝎の如く嫌われている。

〈防衛装備庁〉

しまぎさう し
島崎蒼士 技官。航法援助のシステム開発を行う若手。

〈海上保安庁〉

う が き ま い し り ゅ う
宇垣詠志朗 二等海上保安正。"なつぐも、艇長。

いしばだいすけ
石橋大介 三等海上保安正。"なつぐも、副長兼機関長。

うめ の ゆきよし
梅野征悦 二等海上保安士。"なつぐも、レーダー担当。

《内閣府》

こが はじめ
古賀肇 内閣府政策統括官（経済財政運営担当）。

《内閣官房》

あおやぎむつ き
青柳睦己 内閣安全保障・危機管理室室長補佐。若手防衛官僚のホープだが、慎重派。海南島上陸作戦にも反対していた。

《外務省》

いわくら ひさや
岩倉久彌 総合外交政策局安全保障政策課課長補佐。北米課が古巣。自ら国務省霞ヶ関出張所と自嘲するほどの対米従属派。

〔吉野ヶ里〕

もり た こう た ろう
盛田浩太郎 吉野ヶ里中学校の校長。

しらさぎ せいと
白崎征途 吉野ヶ里中学校の教頭。

かはら さや
華原沙也 吉野ヶ里中学校の音楽教師。

ムンヒョジョン
文晧庭 韓国から交換留学で吉野ヶ里中学校が受け入れていた若い教師。九大に留学していた。

はむろ つばき
葉室翼 吉野ヶ里中学校の新聞部部長。

えだの きみえ
枝野君枝 吉野ヶ里中学校の新聞部員。玄武ミサイルで軽傷を負う。

うがき せいみ
宇垣詠美 記者。地元新聞社の入社三年目。全国紙を落ちて地元新聞社に就職。佐賀出身で宇垣詠志朗二等海上保安正の妹。

//// アメリカ //////////////////////////////////////

《アメリカ合衆国大統領行政府》

エリザベス・ケンジントン 大統領。

ケイティ・ヘンドリクセン 国務長官。

コリン・コンラッド 大統領首席補佐官。アマンダ・マクノートンの上司。

アマンダ・マクノートン 新補佐官。安全保障問題担当次席補佐官から国家安全保障問題大統領補佐官へ就任。

クインシー・ショー ホワイトハウス広報室長。

〔ソウルアメリカ大使館〕

ロバート・B・ワイズナー 大使。元太平洋軍司令官（海軍大将）。

コーディ・R・キム 政務官。国務省のキャリア外交官で、ワイズナーが韓国へ赴任する時、自ら指名してソウルに連れてきた人物。

〈海兵隊〉

セリーヌ・D・タッカー ト 海軍少将。少将に出世したばかりの女性。

〔第三海兵遠征軍〕

ウェイン・R・ヴァンペルト 中将。第三海兵遠征軍司令官。海南島
攻略作戦の指揮をとる。

グレン・ギャレス 少将。参謀長。

キャスリーン・アイザック 中佐。航空参謀。F-35Bのパイロット。

〔第三海兵師団第三偵察大隊B中隊〕

アルベルト・タイラー 中尉。第三海兵師団第三偵察大隊B中隊
フォース・リーコン
武装偵察隊を指揮。

エイベル・リンカーン 曹長。アルベルト・タイラー中尉の女房役。

グレイグ・フィリップス 伍長。

中国

《中央弁公庁》

ファンシチュエマオ
範 学毛 中国共産党中央弁公庁主任。

チィアリィ
賈 礼 日本の中国大使館経済処参事官。

〈陸軍〉

〔海南島独立守備隊〕

マオアイチュン
毛愛軍 少将。海南島独立守備隊を率いる。出世や賄賂とは無縁な
軍人生活を送ってきた、ゲリラ戦研究の第一人者。

ホアンクアンイン
黄 冠英 大佐。作戦参謀。

〔第一〇一待機旅団〕

リンカン
林剛 大佐。これまでの功績により昇進し、新たに第一〇一待機旅団
の指揮をとることになった。

シィモン
石萌 中佐。ハワイでの戦いにおいて情報参謀として素晴らしい働き
をみせて中佐に昇進し、部隊を率いることになる。

スットン
蘇桐 中佐。情報参謀だったが、石萌が参謀長役を固辞したため参謀
長に昇進。

〔第22連隊〕

チィエンホンタマ
銭 宏大 中佐。第22連隊政治将校団副隊長。

ホウウイェ
侯燁 少佐。銭の部下。

大韓民国

《国家情報院》

リユ ジ
柳珍熙 副長官。

チ ジュンユル
池俊烈 中佐。副理事官。

ホンウンソン
洪應善 韓国大使館参与の肩書きをもつ。融和委員会のメンバー。

〈空軍〉

〔第11 戦闘航空団〕

ソンキョン テ
孫庚泰 少将。航空団を指揮する。

オ キョングジュ
吳京周 中佐。第112 戦闘飛行隊を率いる。

ビョングンミン
辺光敏 少佐。飛行隊の副隊長。

〈海軍〉

キムジンイル
金真一 少将。韓米同盟艦隊司令官。

〈海兵隊〉

ソングユウォン
孫周原 少将。海兵隊部隊を率いる。

クンヒョサン
斤孝相 大佐。

パクミン テ
白珉台 中佐。第二三四海兵予備役中隊を率いる。元は韓国最大の軍事顧問会社の中東派遣部隊を率いていた。

チヨン デ ウン
鄭大恩 少佐。副隊長。

〔第二海兵師団〕

ユンベクヨン
尹白龍 大佐。第二海兵師団第二戦車大隊を率いる。

シンガポール

クー・シェンロン 国防大臣。若く野心家で知られる男。夫人は香港人の民主運動家である姚芳芳。
ヤオファンファン

ウン・テクバ 外相。議会の古株で、滅多に感情を表に出さない男。

〈海軍〉

ゴー・チョク・テオ 大佐。

覇権交代3

ハイブリッド戦争

プロローグ

第七管区海上保安部対馬海上保安部所属の三〇メートル型巡視艇しげんどう 〃 なつぐもしげ（一〇〇トン）は、時化の海で舷灯のみ点して航海中だった。

速度は、ほんの四ノット。探照灯を点すこともなく、韓国かんこくの警備艇のレーダーに映っても、漁船に見えるよう注意深く行動していた。

日付けが変わった頃から波が出てきて、一〇〇トンの巡視艇も翻弄ほんろうされはじめた。釜山プサンを脱出し対馬へと向かっていた避難民をのせた船舶も、米軍による航空機雷の触雷で客船が沈没してからは、少なくなっている。

今レーダー上に映る船舶はごく僅か。日本政府

が韓国からの船舶往來を禁じたこともあり、漁船の姿もまばらな状況だ。もちろん日本側の漁船がこんな状況下で出漁するはずもないため、ほとんどは釜山からの避難民を運ぶ密航船である。

〃 なつぐも 艇長の宇垣詠志朗うがきえいしろう二等海上保安正は、ブリッジのスピーカーから小さな音量で流れるNHKの中波放送を聞いていた。

故郷佐賀さがでのあの爆発からは丸一昼夜が経過しているが、取り立てて新しい情報は無い。死傷者の数の確定はまだらしいが、いずれにせよ目達原めだばる駐屯地を狙った韓国軍のミサイル攻撃で、三〇〇名もの民間人が死んだことは疑いようがない。

佐賀と言つても、自分は海沿いの唐津出身。目達原駐屯地は反対側で、もう久留米に近い県境だ。親戚や知り合いも、そう多くはない。

その死傷者の中に、自分の知り合いがいないことを祈るしかなかった。そして、彼らさえ無事なら……という思いに囚われる自分自身を、宇垣は恥じてもいた。

電話をかけて無事を確認したい相手がいらないではないが、少なくともミサイルが着弾した時間帯にあの辺りにいる可能性は低いのだ。宇垣艇長は、そう何度も自分自身に言い聞かせる。

あんな所にいたはずはない、と。

ラジオでは、死傷者の氏名を公表するかどうかを政府が検討しているという話だが、まだその気配は無さそうだ。

いずれにしても、入港してエンジンの火を落とし艇から降りるまで、職務以外の電話はかけられ

ない。いや、かけない。それが、艇長としての矜持きやうじというものだ。

今いる場所は、現在の日韓関係を考えると、いつ韓国側から攻撃を受けてもおかしくない。釜山の真東五〇キロ。対馬北端からも同距離。日韓排他的経済水域EZの境界線上だった。

平時は、互いの取締当局が公船を派遣しても構わない海域だが、この状況下では危険すぎる。対馬北端にある海上自衛隊の対馬警備所からは視界外だ。上空のどこかで、海上自衛隊の哨戒機が見守ってくれていることを祈るしかない場所——。

「艇長、そろそろタイムリミットです。間もなく夜明けを迎えます。韓国側から船影を目撃されるのはまずい。保安部からも、やいのやいの言われますし——」

副長兼機関長の石橋大介いしばだいすけ三等海上保安正が、真つ暗なブリッジでそう進言した。

「ここが限界だと思う？」

「さすがに、この時間帯はもういないでしょう。この時化です。われわれが受け入れてくれるとも、向こうは思っていないはず」

「わかった……」

艇長は、最後にもう一度と思い、自らレーダー画面を覗き込む。フードに顔を埋めてモニターを見ると、釜山の稜線がうっすらと映っていた。出港した密航船も、この時化に翻弄されて引き返したのだろう。

普段なら、絶対にあり得ない静けさだ。

「……この、南西から上がってくる目標は何だ」

宇垣は、レーダー担当の梅野征悦^{うめのゆきよし}二等海上保安士に質す。

付近に船影はないはずだったが。

「しばらく前に現れましたが、漁船じゃないですか？ もし密航船なら、まっすぐ対馬へ向かうは

ずですし」

「だが、会合ポイントに向かってくる。速度は、時化を考えると、こんなものだろう」

五ノットも出ているかどうか怪しい。

「こんな時間ですよ」と、梅野があり得ないという調子で言う。

「脱出は、二四時間態勢だろう。われわれだって、二四時間待ち続けると向こうに約束した。向こうのレーダーに映りやすいよう、針路を31010へ！ 探照灯も点けてやれ」

「韓国側の警備艇にも目撃されます」と、機関長は反対する。

「やむを得まい。自分らがここで待機していることを教えてやる必要がある。向こうは、操縦で手一杯でコンパスを見る暇もないのだろう。ただ真っ直ぐ進めばいいことを教えてやりたい。励みにもなるさ」

「了解。探照灯を点灯！ 針路31010、ようそろ——！」

これでやっと待機が終わる。韓国からミサイルが飛んでこなければいいのだが……。

「ボートの準備もいるぞ！ この波では、接舷は無理だ」

宇垣としては、避難民を収容し、さっさとこの海域から遠ざかりたかった。だが、相手の船はなかなか接近してこない。

こちらも、漁船を装うために速度を抑えている。ようやく両者が交差した時、探照灯で相手のデッキを照らすと、あちらの速度が遅い理由がわかる。ただの漁船なのだ。その毛が生えたような瀬渡し船の上に、救命胴衣を着た避難民が鈴なりになっている。明らかに重すぎるのだ。そのため、慎重に舵を取っているようだ。

巡視艇はいったんオーバースhootすると、瀬

渡し船の背後からゆつくりと接近した。その頃には瀬渡し船は機関を止め、舳先を波に向けて惰性で走る。向こうがようやく集魚灯を点して、合図をよこしてきた。波に翻弄される船上で、避難民らが一生懸命手を振っている。

「機関長、あの人数を回収するのに、何往復すればいいと思う？」

「一度に六人を収容したとして……」

「ゴムボートを、もう一隻出すか？」

「人手が足りませんし、たいして効率的でもないし。可能な限り、両船の間隔を詰めてピストン輸送するしかないでしょう。それこそ、横波をくらつたら衝突するくらいの間隔にまでつめて」

「そうだな……。土産^{みやげ}を用意してくれ。頭領と話してくる！」

巡視艇が完全に停止すると、宇垣はウォーキー・トーキーをたすき掛けにして、重油が入った一斗

缶二つを持って四メートル型複合艇に乗り込む。

そして部下二名とともに、瀬渡し船へと向かった。

かろうじて瀬渡し船に接舷はできたが、舷縁に登っても、デッキは取り付く島もないほど避難民で溢れかえっていた。

本来なら、せいぜい十数人の釣り客を乗せる程度の大きさだ。避難民は、容貌ようぼうからするとほとんどが外国人。主に、東南アジアからの出稼ぎのようだ。他に日本人がほんの数名で、中国人、白人もちらほら。白人の中年女性の一人は、何かを早口で喚いている。宇垣には「ヘルプ！」だけが聞き取れた。

乗り込んできたのが日本のコーストガードだとわかると拍手した避難民もいたが、酷い船酔いを起こしてぐったりとしている者も多い。

ブリッジで舵を取る船長に、宇垣は「頭領！」と呼びかける。とうに八〇歳を過ぎた船長は、ヤ

クザから教え込まれた博多弁はかたを喋り、いつの頃からか「頭領」と呼ばれている男だ。

「頭領、いくらなんでもこんなに乗せちゃ沈没するぞ。もう来ないかと思った」

「燃料の確保に時間がかかった。出港が遅れたせいで、人が集まっちゃまってな。この後、さらに時化るだろう。これが当分最後の密航になる」

白人女性はまだ何かを喚いていたが、宇垣はただちに避難民の移送を開始させた。あとで民族差別があつたと言われないように、まずは女性を、それから年齢順でボートに乗せる。

「あのご婦人は、何を騒いでいるんだ？」

「イギリス人だな。旦那が落ちたんだ。脱出シーンをインスタに上げるとかいつて舷縁に腰を下ろした瞬間、波をくらってな。今は構うな。旦那は救命胴衣を着てたから、帰りに探してみる。一応はな」

「そりゃ酷い。Ｕターンして助けなかったのか」

「米軍がばらまいた機雷が、海流で流されている
って噂だ。釜山から流されるとしたら、こっちだ
ろう」

「燃料はどうだ？」

「そもそも、干上がってるさ！ 何も国家備蓄基
地まで爆撃することはないだろうに。避難民を乗
せて荒稼ぎしようにも、肝心の燃料が無いんだ」

「一斗缶をいくらか用意した。使ってくれ」

「おい、いいのか。そんなことして」

「韓国からの邦人避難は最優先で、現場レベルで
の多少の無茶には目を瞑るという話だ」

「なら、直接対馬の港に入れるようにしてもらい
たいね。こんなやり方は危険だぞ」

「俺もそれがいいと思うが、それをやると韓国人
まで避難してくるだろうからな」

「まさか、韓国軍が対馬を奪還しにくるとかい

噂を真に受けているんじゃないかな」

「……向こうに帰ったら、噂を流してくれ。自衛
隊の対馬防衛部隊は予備役をかき集めて、平時の
三倍に増強されているとね。これは本当らしいぞ。
島中、迷彩服を着た自衛官で溢れかえっているそ
うだ。島民も、本土への避難をはじめているがね。
それで、残念だが避難民の瀬取りもこれが最後だ。
巡視船は目立つというところで、夜明け以降は漁船
を借り上げるようになっていいる。海域はここでい
い。大漁旗が目印だ。あんたが船を出してくれる
限りは、こちらは受け入れる」

「なんだか頼りないな。避難民は今も増え続けて
いる。この混乱を利用して、北がいよいよソウル
に攻め入ってくるって噂もある」

「高速鉄道は、もう動いていないんだろう？」

「ああ、マイカーでやってくるんだ。最近のハイ
ブリッド車は、燃費がいいからな。渋滞さえ我慢

すれば、釜山までは辿り着けるさ。戦争を仕掛けた相手の国に逃げようなんて、変な話だがね。そんなわけで、港は国外脱出を企てる非国民を取り締まるために、軍や警察が見張っている。わしはそれなりに人脈を築いて裏を掻いてきたが、それでも限界はある。大っぴらに、いつまで船を出せるかはわからん」

避難民を乗せた複合艇が、ほんの一〇メートルほど離れた場所に停泊する巡視艇とを往復している間に、宇垣はイギリス人が落ちたエリアを特定し、海流などから搜索エリアを検討した。波浪はすでに一メートルを優に超えている。時間が勝負になるだろう。

「気をつけろよ、韓国側領海に近い。まあ、海洋警察庁も面子があるからな。釜山の目と鼻の先で保安庁の巡視艇が動いているなんてことがわかつたら、意地でも機雷原を突破して警備船を出して

くるだろう。一応、搜索したという形でいいんじゃないのか？ 落ちたのは自分の責任だ」

結局、避難民の収容には四〇分を要した。

その後、頭領に別れを告げて速度を上げて西へと走る。船の重心位置が上がるほどの乗客を乗せていたので、下層デッキまで移動してもらいうしかなかった。全員にゲロ袋を渡したが、船酔いでそこから中に座り込む者が続出した。

邦人の避難民から街の様子や避難状況を聞き取り、速やかに報告を上げよとの命令を受けていたが、今はそれどころではないだろう。

韓国では、発電システムがブラックアウトを起こし、携帯網もダウンしている。韓国国内の様子を知る術はなく、ラジオから流れる政府広報のみが頼りで、流言飛語が飛び交っているということだったが、外部にはその内容を知る術はない。

頭領の瀬渡し船を置いて、搜索海域に到着した。

信じられないことに、いくら陸地に接近しても釜山に灯りは見えない。本当に真つ暗闇だ。どこが陸地かもわからない。

投光器で海面を照らして、溺者の搜索をはじめ。暗視双眼鏡も使った。搜索開始後二〇分ほどすると、レーダーに船影が現れた。速度が速い。三〇ノット近くは出ている。おそらく海洋警察庁の警備艇だろう。

「あと三分だ！ 三分探して見つからなければ引き揚げるぞ」

四分が経過し、針路を東へととってゆっくりターンした。そして速度を上げようとした矢先、外に出ていたワッチが右舷側に手を振っている溺者を発見した。波間に浮き沈みしているが、大男なのが幸いしたのだ。反射テープが貼られた救命胴衣を脱ぎ、頭上で振り回している。

「複合艇を降ろしている暇はない。浮き輪を投げ

て回収する！」

減速しながら、ピンポイントで溺者に接近していく。機関が停止すると、背後から海洋警察庁の警備艇のサイレンが聞こえてくる。

機関長がオレンジ色の浮き輪を持ってデッキに立った。巡視艇は、溺者のほんの一〇メートル横に接近する。機関長が浮き輪を投げると、イギリス人男性の一メートル前に落下した。無事に男は浮き輪をつかまえる。

「お見事！」

四人がかりで、浮き輪に結んだロープを引く。巡視艇は完全に停止しているわけではないので、たちまち水の抵抗で引っ張られたが、四人の乗組員のパワーが勝った。イギリス人をデッキに引き揚げたと同時に、宇垣艇長は「フルスロットルだ！」とブリッジに怒鳴る。

警備艇は、すでに五〇〇メートル背後にまで接

近していた。投光器がこちらの船尾を照らしている。

宇垣はブリッジに駆け込むと、艇内スピーカーのマイクを取る。「全員、何かにつかまれ！ これからすつ飛ばす」と英語と日本語で繰り返した。「悪いが、向こうは追いつけない」

事実、なつぐもは、波の上を飛び跳ねるようにウォータージェット推進ですつ飛ばし、韓国領海付近から対馬へと突き進んだ。巡視艇が波を乗り越えるたびに「ドーン！」という衝撃音がして、身体が宙に浮く。船内の至る所から、避難民の悲鳴が聞こえてくる。

彼らにとっては、地獄の脱出行だっただろうが、それでも電気も物流も止まった釜山に取り残された人々に比べれば、遥かに幸運なのだろう。

世界は混乱していた。

日本は、米国とともに中国と戦っていた。南シナ海で戦い、ハワイで戦い、今は海南島^{かいなん}に上陸して戦っている。日本本土は遠く戦場から離れていたが、推移を見守っていた韓国が中国側について参戦し、弾道弾ミサイルが軍港・佐世保^{させぼ}と陸自の補給と回転翼部隊がいる佐賀の目達原駐屯地に降り注いだ。

佐世保はほとんど無傷だったが、目達原駐屯地では反戦デモ隊が集まっていた正門ゲート付近に一発が着弾し、三〇〇名余りもの市民と警官隊が死亡した。

これに、アメリカ軍はただちに反応し、グアム基地から発進した攻撃部隊が韓国全土のレーダーサイトを潰して航空機雷で主要港を封鎖。石油備蓄基地まで攻撃した。

韓国は混乱の最中にあり、その余波は国境の島々にも押し寄せていたのだ。

第一章 虎口の罠

どんな戦争も、回避するに越したことはない。そしてあらゆる戦場は、それがどんな大戦果で終わろうとも、兵士にとっては常に最悪の経験にすぎない――。

南シナ海に突き出た海南島で陸上自衛隊が経験している状況は、あらゆる要素において、当事者としての主観は元より、客観的にも最悪と言っても過言ではなかった。

中国軍が運用していた海南島最大の軍用飛行場をほぼ無血占領したまではよかったが、基地の裏山に張り巡らされた坑道に人民解放軍が立て籠もり、闇夜を利用して数度の攻勢を仕掛けてきたの

だ。

夜が明けた時、塹壕ざんごうを掘って立て籠もった水陸機動団の前には、死体の山ができていた。

その最前線で最も過酷な戦闘を耐え抜いた一個小隊は、東京から視察にきた官僚たちを出迎えにいき、そこから戻る途中に、撃墜された海兵隊武装ヘリの搭乗員の救出を命じられた。

これは、簡単な任務のはずだった。生きているパイロットと、可能ならば遺体も回収。武装ヘリを燃やして脱出する。――だがそれは、解放軍が仕掛けた罠だったのだ。

武装ヘリが墜落した場所は、すり鉢状の禿はげ山やま

の底で、接近したオスプレイはたちまち対空ミサイルの餌食^{えじき}となった。

一個小隊と官僚たちは、すり鉢の底に僅かに茂^{しげ}った森に立て籠もり、味方の援護をひたすら待ったが、その間にも上部から激しい十字砲火を浴びて戦死者と負傷者を増やしていった。

夜になり、ようやく増援を得て脱出した時には、部隊の指揮官ですらシエル・シヨックに陥っていたほどだ。

そして、部隊を収容中に激しい十字砲火を浴び続けたCH-47JA、通称「キャリバーCH」はローター・ブレードに多数被弾し、結局海岸線までもたずに不時着した。あくまでも墜落を避けての安全確保手段だったが、そこはまだ敵地上部隊の勢力圏内。軍用飛行場を出て地上からの救出に向かっていた味方部隊も、人民解放軍とともに戦う韓国軍部隊の迎撃を受けて、立ち往生を余儀な

くされている。

キャリバーCHには、一個小隊を超える兵隊が乗っていた。救出される部隊と救出に向かった部隊、メディックや防衛医官だ。そして、現場の視察に向かう途中の官僚三人のうち、二人は重傷だった。

救出部隊との合流は見込めず、ヘリコプターの接近も叶わないとわかると、防衛医官は即座にある判断を下した。結果、CHのキャビンにおいて、腹部銃創を負った隊員の緊急手術がはじまろうとしていた。

水機団の分隊を率いて乗り込んでいた小隊長も同行した特殊部隊の小隊長も酷いシエル・シヨックに陥っていたことで、救出に駆けつけた第一空挺団・第四〇三本部管理中隊、その実、特殊作戦群隷下の〈特殊部隊サイレント・コア〉一個小隊を率いる原田^{はらだ}拓海^{たくみ}一尉は、難しい立場に置かれて

いた。

彼は、パイロットを除けば今ここにいる士官で唯一正常な精神状態にある。だが同時に、看護師免許をもつメディックでもある。外傷治療のスペシャリストである防衛医官の香坂理江三佐が今、ここで最も頼りにしている助っ人なのだ。

原田は今、マスクをしてラテックス手袋をはめて、キャビン中央に立てたストレッチャーを挟んで香坂の向かいに立っていた。

負傷した三名の官僚も、それぞれに手術を手伝っている。内閣安全保障・危機管理室室長補佐の青柳睦己あおやぎむつぎは無傷で戦場を脱出したので、LEDライトで患部を照らす役を仰せつかり、外務省総合外交政策局安全保障政策課課長補佐の岩倉久彌いわくらひさやも右手の甲に穴が開く負傷をしたが、左手で輸液パツクを持ち肩の高さを保持していた。

女辻参謀の異名を持つ防衛省統合幕僚監部参事

官付国外運用班長の小磯小代里こいそこよりも、銃撃による破片で耳を切り裂かれていたが、治療後はパツク詰めされた飲み水から消毒用の水をせつせと作っている。

香坂医官は、手術台の近くにいた二人の素人しろうとには卒倒せずに済むように、顔を逸らすよう助言していた。そのため、岩倉は背中を向けて立っている。

ツナギの作業服を着た装備庁の若手技官・島崎蒼士そうしは、バラクーダ・ネットを使って遮光カーテンを後部ランブドアに設置していたが、緊急のオペルームになったここには、ぞっとする光景が広がっていた。

まず寝かされた患者は、ズタボロに傷ついた腸のほとんどが外に出ている。それがストレッチャーから、だらりと垂れているのだ。

こんな状態で数時間生きていたことが不思議な

くらいだ。

「原田さん、戦傷医療の最優先事項を聞いたことがある？」

香坂はぼろぼろの腸を縫い、急造した生理食塩水で洗うと、漏れがないことを慎重に確認しながら呟いた。

外側は綺麗にした。弾の破片が腸中に残っていたら内側から傷付くことになるが、今は救命が第一だ。レントゲンがある場所まで保てばいい。

「はい、米留していた時に散々聞かされました。

——負傷兵を無事に連れ帰ることではない。部隊の戦闘を継続させることが、メデイクに課せられた最重要課題である」

「その通り。今こそ、その時よ。ここはもういいわ。あなたは、本来の任務に戻ってください」

「はい——！」

原田は、香坂が防衛医大から連れてきたベテラ

ン看護師に場所を譲り、二歩下がった。そして手袋を取ると、戦闘用のグローブを装着する。

グレネード・ランチャーを手にとると、機外に光が漏れるのを防ぐためのバラクーダ・ネットを一瞬だけ開いて地面に足をつけた。

暗視ゴーグルの電源を入れると、目前には静かな湖面がある。湖というより、農業用の溜池の類だろう。

「キャッスル、報告を」

「現在、防御陣地を構築中。まだ敵の攻撃はありません。味方増援部隊は南側で交戦中です。おそらく、敵はわれわれを餌にして、味方の増援部隊を潰す作戦でしょう」

キャッスルこと大城雅彦曹長が林から抜け出てきてすぐに応えた。

「しかし、このへりは目立つな。いい的になる」

「個人的な意見を言わせてもらえるなら、自分が

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。